

Reggionarra as a Citizen's Expression Education Project : Through the Background to Promote Qualitative Growth and Review of the Program in 2018

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱口, 由美, 高野, 牧子, Yumi, Hamaguchi, Makiko, Takano メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10775

市民表現教育プロジェクトとしての Reggionarra 質的成長を促す背景と2018年のプログラムの検証を通して

Reggionarra as a Citizen's Expression Education Project

Through the Background to Promote Qualitative Growth and Review of the Program in 2018

濱口由美¹, 高野牧子²

Yumi Hamaguchi¹, Makiko Takano²

[要旨] 本研究では、レッジョ・エミリア市の reggionarra を市民表現教育プロジェクトとして捉え、その質的成長を促す背景となる「参加」や「語りのアプローチ」について、乳幼児教育とつながりのある観点から整理と検討を行った。乳幼児教育が中心であった「参加」や「語りのアプローチ」の対象が、保護者の意識変化やレッジョ・エミリア市の教育行政改革によって、生涯教育を意識したものへと変容していることを考察した。また、市民表現教育プログラムの質的成長を目指し、どのような「語り」の場が提案されているのかについて、2018年に実施された3つのプログラムを検証した。その結果、視覚障害の壁を超えて伝え合うお話づくりの場、移民の高校生たちの居場所をつくる語りの場、地域の課題を共有するためのお話づくりの場などが、造形の言葉などを活用しながら提案されていることを明らかにした。

[Abstract] This paper, with an understanding of the Reggionarra Program in Reggio Emilia as a citizen's expression project, organizes and examines the topics of participation and storytelling approaches, which provide the backing that promotes project growth, from a perspective that is linked with early childhood education. The view of this paper is that the concepts of participation and storytelling approaches that had been aimed at infant and early childhood education turned into a project aimed at life-long education for all people due to changes in awareness among parents and guardians as well as educational administration reforms in Reggio Emilia. This paper also examines three programs implemented in 2018 in terms of the kinds of storytelling venues proposed for the purpose of promoting participation among the diverse citizens of the city. These examinations showed that proposals had been made regarding venues for creating stories that enable people with and without visual impairment to acquire figurative language, storytelling venues that create a place where even immigrant high school students feel welcome, venues for creating stories that enable community residents to share information about issues, etc. all while making use of a variety of types of language (figurative language, etc.).

[キーワード] レッジョナラ、レッジョ・エミリア、参加、市民表現教育プロジェクト、語りのアプローチ、造形の言葉

[Key words] Reggionarra, Reggio Emilia, Participation, Citizen's expression education, Storytelling approaches, Words of color and shape

[所 属] ¹福井大学 (University of Fukui), ²山梨県立大学 (Yamanashi Prefectural University)

[受理日] 2018年12月25日

1 はじめに

1-1 研究目的

Reggionarra は、北イタリアのレッジョ・エミリア市において毎年5月に開催される「語り」に特化したアートプロジェクトである。

本稿では、reggionarra を市民表現教育プロジェクトとして捉え、質的な成長を促す背景と実際の一端を明らかにすることを目的とする。そのために、質的成長を促す軸と想定した「参加」や「語りのアプローチ」について、乳幼児教育とのつながりを踏まえ整理と検討を行うとともに、2018 reggionarra で収集したデータをもとにプログラムの実際を再構成し、どのような「語りのアプローチ」が用いられていたのかを検証する。

なお、本稿における「参加」とは、「教育への主体的参加」を意味するものである。また、「語りのアプローチ」とは、多様な言葉（言語だけではなく、造形の言葉、身体言葉などの表現ツールを含む）を用いて、「物語の語り」は、意味をつくり出し、新しいものに開かれて、対話と関係づくりを開始し、まだ見ぬ世界に可能な形を与える方法¹といった reggionarra 特有のストーリーテリングを表現する言葉として用いた。

市民表現教育プロジェクトの観点から捉えた reggionarra については、2016年に実施されたプログラム（初等教育とつながりのあるもの）の検証を踏まえた筆者らの研究²において、以下のことを明らかにしている。

① reggionarra は、乳児保育所・幼児学校の保護者を対象とした「語り」の講座が礎にあり、乳幼児教育で

培われてきた「語りのアプローチ」が活かされたプログラムが用意されている。

② 保護者や教師にとっては、レッジョ・エミリア市の教育活動への理解と参加を市民に促すパフォーマンス評価の場となっている。

③ 造形表現などの多様な言葉を用いることで、多様な市民の参加を促す入り口に広がりが出てきている。

このような検証結果から、reggionarraは、乳幼児教育で培ってきた「語りのアプローチ」の教育的価値を市民と共有し、多様な市民の参加を促す「語り」の場を創造する市民表現教育プロジェクトであるといえよう。本稿では、こういった捉え方を踏襲しつつ、現地調査で収集した関係者へのインタビュー記録、2018年reggionarraにおいて新規の提案が見られたプログラムの観察記録等を新たな研究資料に加え、reggionarraの質的な成長を促す背景と実際の一端を明らかにすることを目的とする。

1-2 研究の背景

ローリス・マラグッツィ³は、真の教育的価値を見出そうとする全ての人々が主役といった「参加」の概念を軸に据え、レッジョ・エミリアの乳幼児教育を発展させてきた。子どもたちの教育的可能性や展望を拡張し、学校や家庭の役割を活性化するためには、全ての人のアイデアや能力が寄与されるネットワークのモデルを提案することが重要であると考え、子ども・親・教師とそれぞれの立場から教育の共同体に「参加」する権利を述べた文書「権利の憲章」⁴を1993年に発表している。連帯と協力の市民同盟の伝統⁵をもつレッジョ・エミリアの地域性もあって、「参加」は乳幼児教育の重要な柱となり、乳幼児教育施設をめぐる市民共同体を形成してきた。

保護者たちの「参加」の具体例として、子どもの育ち方や学び方について親が教師と夜遅くまで学び合う月例会や、「共同体と責任」といった哲学的テーマをめぐる話し合いが実施されていることなどが報告されている⁶。また、1995年6月に実施された保護者へのインタビュー記録には、園での話し合いや教育運営への「参加」によって培われた、子どもを見守る姿勢、子どもの行為を理解する眼差し、子どもの移行期に必要な支援のあり方などに対し、保護者としての自覚と責任ある声が記されている⁷。筆者らが2016年に訪れたマラモッティ幼児学校においても、2階建の園舎建設に際し、「建築家・保護者・幼稚園スタッフが集まり、子どもたちにとって、階段があることの意味や2階の必要性、安全面等について話し合いの場を何度もつた」といった「参加」にまつわるエピソードを聞いたことがある⁸。このような事例

からも価値ある教育内容や実践を子どもや教員と分かち合おうとしてきた保護者たちの「参加」が見て取れるだろう。

その一方で、筆者たちが現地調査に入った2016年のreggionarraでは、乳幼児教育での分かち合いとは異なる保護者や市民の「参加」に遭遇することになった。多様な市民（保護者、一般市民、芸術家、学校・美術館・博物館・図書館の関係者など）が学びの共同体を形成し、それぞれの得意な表現を活かし合いながら「語りのアプローチ」を探求しようとする「参加」であり、価値ある課題や多様な言葉で「語りのアプローチ」を生み出す方法や交流のあり方を提案しようとする「参加」であった⁹。

筆者たちは、保護者たちの「参加」に対するこういった意識の変化が、reggionarraの市民表現教育プロジェクトとしての質的な成長を支えてきたのではないかと同時に「参加」に対する変化は、保護者たちの理解と表現のプロセスを生み出す「語りのアプローチ」を通して生じてきたものではないかと考えた。そこで、「参加」と「語りのアプローチ」を市民表現教育プロジェクトとしての成長を支える「軸」となるキーワードと想定し、reggionarraの背景と実際を探ることにした。保護者や市民の「参加」の変化に着目し、市民表現教育プロジェクトの観点からreggionarraの動向を探ることは、地域社会に開かれた学校教育課程の改革を目指す我が国においても有意義な示唆を得られるものであろう。また、造形という言葉が重視される「語りのアプローチ」とも関連づけて検証することで美術教育の新たな展開にも貢献できると考える。

1-3 研究の方法

まず、reggionarraの質的成長を促す軸と想定した「参加」や「語りのアプローチ」について、インタビュー記録やレッジョ・エミリア市の乳幼児教育や教育行政について記された複数の文献をもとに、乳幼児教育とのつながりを踏まえて整理と検討を行う。インタビュー記録は、2018年5月23日、reggionarraの市民表現教育プロジェクトとしての成長を探ることを主な目的として、reggionarraの立ち上げに関わった当事者の1人Paola Feretti氏（以下、Paolaと記す）に行なったものである。筆者（濱口）が質問者となり、イタリア語から日本語への通訳¹⁰を介して実施した。Paolaは、レッジョ・エミリア市幼稚園教諭を20年間務めた後、2001年から市の教育機関の一つである「ジャンニ・ロダーニ演劇実験室」の指導者として抜擢されたキャリアを持つ人物であり、

reggionarra の前身となる講座の企画や黎明期の運営も担当していた。インタビューの内容は、この時期の取り組みに関することが中心となっている。このインタビュー記録と 2016 年 reggionarra の報告書（濱口・高野・猶原、2017 年）をもとに保護者の「参加」に対する意識の変化を探る。さらに、直近の教育行政関連記事や過去の重要文献が掲載される『re child-REGGIO CHILDREN NEWSLETTER』¹¹ と乳幼児教育に長期に関わってきた関係者（教育行政担当者、保護者、アトリエスタ等）の実践とその省察が対話を通してまとめられている著書『子どもたちの 100 の言葉 - レッジョ・エミリアの幼児教育』（2001）を主な参考文献とし、「参加」と「語りのアプローチ」について、乳幼児教育とのつながりの観点から整理する。

次に、2018 年 reggionarra において、多様な人の参加を促すための新しい提案がなされていた 3 つのプログラムを取り上げ、「参加」や「語りのアプローチ」の視点を踏まえて検証する。検証する資料は、筆者らが 2018 年 reggionarra で収集してきたフィールドノーツ・ビデオ記録・2018 reggionarra パンフレットなどであり、2 名の協力者¹²によって得られた翻訳データと合わせて資料とする。こういった資料を用いて、「語り」の場の再構成を行い、どのような「語りのアプローチ」や「参加」の形が提案されていたのか間主観的考察を行う。

2 Reggionarra をめぐる参加の背景とアプローチ

2-1 Reggionarra における保護者の「参加」の変容

本節では、Paola へのインタビューと報告書「レッジョ・ナラのキセキ」をもとに、reggionarra の黎明期と現在を整理し、保護者の「参加」に対する意識の変化を探る。

(1) reggionarra の黎明期と保護者の「参加」

2005 年、童話作家アンデルセンの生誕 200 年にちなみ、reggionarra の前身とも言える「保護者のための語りの講座」が開かれた。当時、Paola がスタッフとして勤務していた「ジャンニ・ロダーニ演劇実験室」の主催であった。「子どもたちが素晴らしい物語世界を紡ぐためには大人たちの美しい語りが重要である」と言った趣旨で募集を行なったところ、定員 23 名に対し 60 名以上の保護者から申し込みがあった。ジャンニ・ロダーニ演劇実験室のスタッフたちは、受講希望者が多かったことに驚くとともに、「語り」について興味を抱く保護者がこれほどいたにも関わらず、自分たちはどうしてこういった研修の場を設けてこなかったのだろうと後悔したという。「保護者のための語りの講座」は、その後も継続され、

「語り」の表現技術の向上のみならず、年齢に合わせた絵本の選び方、「読む」と「語る」の違い、「聞く力」の重要性といったテーマについても学び合う講座へと進展していった。保護者の「語り」は、講座が始まって 1 年も経つと、「自分たちの語りを聞いてほしい。語りを披露する場所がほしい」という希望を抱くほどに上達していた。2006 年、保護者たちによる初めての「語りの会」は、アンダーセン（アンデルセン）幼児学校とチーズ工場の跡地（現在は、ローリス・マラグッツィ国際センターとなっている）の 2 箇所を会場として実施された。翌年の 2007 年開催された発表会の場が第 1 回 reggionarra となった。会場には、学校や公共施設の他に個人宅の庭なども使用されていたということである。

後に、「全ての人々が、物語に翻案されるに値する宝物のような経験を有している。だからこそ、reggionarra は、多くの保護者や教師たちや都市の人々に、語るためのアプローチに近づく機会を提供してきた」¹³ といった活動紹介が記されている。

(2) 現在の reggionarra と保護者の「参加」

現在の reggionarra は、広場、劇場、美術館、博物館、図書館、病院といった市のあらゆる空間をステージとし、多様な市民が語り手として参加している。また、世界を舞台に活躍するプロのパフォーマーの召喚も年々増えており、規模の拡大には目を見張るものがある。

その一方で、reggionarra の原点を想起させる保護者たちによる「語り」も街のギャラリーなどを会場にして、人気を博するプログラムとして毎年発表されている。筆者らの研究でも取り上げたことのある『保護者による 6 つのお話』では、保護者や教師、元保護者らが語りのチームを作り、幼児学校の子どもによって創作されたファンタジーのお話を「光・ドリッピング・水・身体・音・映像」といった多様な言葉で見事に謳いあげていた。その姿は、子どもの世界の代弁者というより、子どもの世界を自分たちが納得する言葉で語る表現者であった¹⁴。

(3) 保護者の「参加」の変容

保護者の「参加」は、乳児保育所や幼児学校の子どもたちのために美しい語りの言葉を手に入れるようとする学び手から、多様な言葉で、物語を理解し、解釈し、新しい命を与えて、多様な市民の前で語ろうとする表現者としての「参加」へと変容しているといえよう。

2-2 「参加」を促す教育行政の飛躍と成長

Paola は、乳幼児教育機関を超えた多様な「参加」を reggionarra に促せた背景には、「すべての市民に教育サービスを拡充し、教育投資を行う」といった教育行政制度

の飛躍があったことを指摘した。そこで、まず市の教育行政の変遷を整理し、施設や機関による reggionarra への「参加」の変化について探る。

(1) 教育行政の変遷と飛躍

レッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校における地域を基礎とした「参加」は、1945年の幼児学校建設時から乳幼児教育関係者においてはすでに根付いていたが、地域の「参加」が市の公式的な後援を得られるようになったのは1970年に入ってからである。1972年に、市議会で乳幼児教育を街の運営の大きな柱のひとつとする条例が可決され、乳児保育所や幼児学校にアトリエをつくり、アトリエスタを配置するなどの具体的方針案が提出された。教師・保護者・市民・地域の団体を含む学校から民主的に選出された組織も、「学校と市委員会（1970-1980）」、「経営評議会（1981-1999）」と展開させてきた。公的な教育サービスの提供者たちと共に、教育について真摯に学び合い、集団で「責任をとる、問題を解決する、決定を下す」といったプロセスを共有しながら、地域を基盤とした「参加」を体現してきた¹⁵。現在に至る「都市-子ども評議会（1999～）」は、こういった地域を基盤とする学校経営が浸透してきた上での飛躍であった。昨今の社会状況との関係を見直し、俯瞰的視野から教育改革指針を吟味し、新たな取り組みに対し積極的に支援していくことを目的に発足されている。新たな評議会委員選挙があった2017年の『rechild』には、都市-子ども評議会の新評価委員選挙（2017-2020）」に向けて開催された会合の場で、「本評議会委員会の設立目的や新たに目指す課題をもう一度確認し、新しい評議会委員選挙にみんなで参加しよう」と呼びかけた luca Vecchi 市長の言葉が、マラグッツィの論考「参加と民主主義の学校」とともに掲載されている¹⁶。

(2) 新しい教育サービス施設の設立と協働体制の確立

市の教育行政は、移民の増加（2018/01/01 現在、居住者の16.4%）¹⁷に伴って浮上してきた多文化共生教育や幼小一貫教育の必要性といった課題についても教育サービスの拡張で解決しようと、新しい教育研究施設、機関、プロジェクトの設置を進めてきた。その一つが、Paola が現在勤務している「SEI（Spazi Educativi interdisciplinari：学際的教育スペース）」である。SEIは、6歳から12歳までの子どもにレッジョ・アプローチを活かした教育サービスを提供するための教育施設であり、現在は6カ所まで増えている。施設には、0歳から12歳までの子どもたちが、学校が始まる前の朝の時間と放課後の時間に通ってきている。また、国立の小学校と市立の幼児学校といった異なる管轄・校種の壁を超え、小学校と幼児

学校の教員たちが一緒になって教育研究に取り組む場にもなっている。現在は、レッジョ・アプローチを活かした小学校と幼児学校の連携によるプロジェクトの実践も展開している。

この他にも、市は青少年や一般市民を対象とした機関やプロジェクトを立ち上げ、教育サービスの拡充に努めてきたこともあり、2018年 reggionarra では、新たな機関や多様なプロジェクトチームの協働で企画されるプログラムが増加していた。市の教育サービスの拡大が、市の多様な教育財産（人材・場所・教材・言葉）を活かし合うことのできる「参加」を促してきたとも言えるであろう。

2-3 乳幼児教育の教育哲学と「語りのアプローチ」

繰り返し記すことになるが、「語りのアプローチ」における言葉は、実に多様である。言語のみならず、「色や形、光、素材などから構成される造形の世界」「身体の世界」「音楽の世界」などが創造的に組み合わせられ、豊かな文脈をもつ物語として語られている。ここに、「子どもには100の言葉がある」と謳ったマラグッツィの教育哲学との強いつながりを見出すことができる。マラグッツィは「話し言葉」と「書き言葉」に支配されていた学校の教室文化に異を唱え、言語能力の弱い子どもであっても話し合いに参加したり考えたり表現したりすることができる役立つ言葉として、多様な表現の言葉を用いた。その中でも、一番重視していたのが「造形の世界」である。グループ活動の観察を通して、「造形の世界」が、子どもたちのアイデアを伝え合うための手段として有効であること、アイデアの交渉と変容を促す思考のツールとなることを確信していたからである¹⁸。アトリエスタのヴェア・ヴェッキも、「造形の世界」について、子どもたちにとっては思考や感情を組み立てるものになり、大人たちにとっては異なる職業や社会的背景もつ人々とのコミュニケーションや対立の過程に有用である可能性があるといった内容を語っている。また、アトリエについても、子どもたちには、彩色、線描、粘土など、あらゆるシンボルによる言葉の習得の場となり、大人たちには、子どもがどのように学ぶのかについての理解を助ける場所となると語っている¹⁹。

「語りのアプローチ」は、こういったレッジョ・アプローチの実践から導かれてきた言葉に対する教育哲学が根底にある。物語をただ語るだけでなく、互いのイメージや思考の回路を共感的に理解するためのプロセスや互いの解釈やアイデアを重ねていくプロセスをつくり出すために、造形の世界などを用いるのである。

3 新しい参加を提案する 2018reggionarra

2018年 reggionarra のうち、3つのプログラムを取り上げ、現地で収集したデータをもとにプログラムの実際を再構成し、どのような「語りのアプローチ」が用いられていたのかを問主観的考察を交えて検証する。

3-1 手と素材の関係から言葉やイメージを紡ぐプログラム

(1) プログラムの背景

プログラム名：私は道であなたたちに出会う

実施日：2018年5月19日 16:00-18:30

本プログラムは、レージョ・エミリア市の「障壁のない都市」プロジェクトチームによって企画された。会場は、街の中心部にある美術館 Museo de Tricolore、活動スタッフは盲学校教師の Paola Terranova 氏など。参加者は4歳から8歳までの子どもとその保護者たちであった。

(2) 活動の実際

まず、点字つき触察絵本『Lino il Bruchino』を用いての語りから導入が始まった。主人公の小さな毛虫リノは頭が1つだけの青虫。長い体が欲しくて出かけたところ、道で出会った、木、トカゲ、花などから、体の一部になるピースをもらい、長い体になって家に帰るという内容であった。異なる素材で形作られピースは裏側にマジックテープがついており、形や質感を手で確かめながらリノに手渡せるようになっていた。スタッフたちは、こういった触察絵本の特徴を活かし、手で触ったりピースを動かしたりしながら語っていた(図1)。読み終えたあとは、文章頁下段に記された点字についても指でなぞりながら説明をしていた。続いて、海、砂浜、陸などいろいろな素材で表現されている触察画(1辺1mほどの正方形パネル)を床に広げ、手を動かしながら触って見ることを子どもたちに促し(図2)、その場所の様子やそこに住む生き物を手で触った感じからイメージさせていった。

その後、子どもたちを作業場に誘導し、好きな生き物を制作する活動へとつなげた。作業場には、多種類の紙、ワイヤーやボタン、糸、リボン、セロハン、フェルトなど質感の異なる素材が用意されており、子どもたちは思い思いに材料を選んでいった(図3)。素材選びの最中、小学校低学年ぐらいの青眼鏡をかけた男の子が目止まった。男の子が、2本の緑のモールを手にとるとそれを擦り合わせたり、フレキ菅のような素材を手にとると曲げたりそらしたり、異なる素材を組み合わせるとシンバルのように叩いたりしていたからである(図4)。しかし、語り手も保護者も、その様子を見守るだけであった。



図1：手で触って読むスタッフ



図2：触察画を触る子どもたち



図3：素材を選ぶ子どもたち



図4：素材に働きかける男の子

素材を選んだ子どもたちは、保護者との共同作業で、質感の異なる素材を組み合わせながら、蝶や蜘蛛などの生き物をつくり出していた。

(3) 考察

一見すると素材を乱暴に扱っているようにも見えた青眼鏡の男の子の行為を、話し手や保護者は、制御することもなく見守っていた。それは、男の子の素材に働きかけようとする行為に意味があることを理解していたからではないか。皮膚面から得られる知覚は、素材の質感や弾性を捉えるセンサーにはなるが、触れるだけでは「曲がる」「捻る」などの素材がもつ機能を発見することは難しい。おそらく、男の子の素材に働きかける行為を、素材がもつ多様な言葉やイメージを探るプロセスとして捉えていたのであろう。このように考えると、触察絵本や触察画を触って見る行為から生き物制作へとつなげた今回の「語りのアプローチ」の意味が見えてくる。制作プロセスには、手を動かしながら触る、手で包むように触る、手で押しながら触るといった素材に働きかけるいくつかの行為が自然に生まれてくるからである。

今回の参加者には、視覚障害のある子どもはいなかったが、盲学校の教師や「障壁のない都市」プロジェクトの企画であったことから、視覚障害があるなしの壁を超え、自らの手と素材によって得られる言葉とイメージで紡ぎ出す探究的な「語りのアプローチ」を提案しようとしていたのであろう。

3-2 移民の高校生が語り手となるプログラム

(1) プログラムの背景

プログラム名：子どもの小さな家の4つの物語

実施日：2018年5月19日 16:00-18:00

本プログラムは、市内の二つの高校、レッジョ・エミリア市の「市に参加するプロジェクト（14歳～29歳対象）」チーム、市内にあるライオンズクラブの協働企画である。会場は、町外れの総合病院（Arcispedale Santa Maria Nuova）、語り手は二つの高校（Liceo Ariosto Spallanzani, Liceo Moro）の生徒3名、聞き手として入院患者の子どもたち3名とその家族などが集まっていた（図5）。ここでは、「引きこもっていたおじいさん亀が、子亀に励まされ一緒に旅に出かける。」といったストーリーが、紙芝居と演劇によって交互に語り直す「語りのアプローチ」によって表現されていた。

(2) 活動の様子

最初は、1人の高校生による紙芝居の語りから始まった。語り手は、おじいさん亀が子亀と一緒に外へ出かけるために帽子を被って準備をする場面までを読み終えると紙芝居を中断させた。少し間を置き、今度は演劇での語りが始まる。2人の高校生が登場し、紙芝居と同じ場面を演じ始めた。どちらの役を演じているかが伝わるように、1人は子亀と同じ赤いリボン付けて登場し、もう1人の高校生も演劇途中から帽子を被った。演劇表現になったこと以外に、紙芝居の語りとの違いが台詞に表れていた。子亀が「ザオ シャン ハオ（おはよう）」と中国語で話しかけると、おじいさん亀が「ドープロホラーク（おはよう）」とウクライナ語で返すといった具合に、異なる2カ国語の対話によって物語が語り直されるのである。聞き手にとっては、どちらも外国語となる言語であったと思われるが、懸命に演じる高校生たちを見入っていた。身体の動き、顔の表情、声の抑揚等と重ねて高校生たちの母国語を受け止め、紙芝居からイメージした物語世界をさらに膨らませているように伺えた。

イタリア語での紙芝居を中国語とウクライナ語を用いた演劇で語り直す輪唱形式の「語りのアプローチ」（図6）は、物語の場面ごとに区切られながら最後まで続いた。語り終わると、3人は手をつなぎ合わせ、フロアに向かって何度も挨拶をした。終了後のインタビューで、子亀と



図5：総合病院内の会場



図6：演劇（前方）から紙芝居（後方）へ

老人亀を演じたのは、移民の高校生たちであり、中国語とウクライナ語は、彼女たちの母国語であることが判明した。また、パンフレットの紹介では、13ヶ国語で語られるお話と紹介されていることから、別会場では出身国の異なる高校生が語り手となり、中国語やウクライナ語とは異なる母国語での「語りのアプローチ」が見られたのであろう。

(3) 考察

紙芝居と演劇の表現を通して、異なる言語を用いて語り直す輪唱形式の「語りのアプローチ」は、移民の高校生たちの参加を促すために考えられたものではないか。母国語で表現できる場を用意された喜びが、懸命な語りや演技を引き寄せたと思われる。また、異なる言語や文化をそれぞれにもつ高校生たちにとっては、別の母国語をもつ友達のイメージのずれを身体の言葉で感じ取り、また紙芝居の世界をたどり直すといった、互いの物語世界への再訪と再解釈を繰り返すプロセスを経験することになったであろう。

異なる言語や文化を持つ高校生たちの共同参加を促すこの「語りのアプローチ」は、異なる他者と協働しながら、自らのアイデンティティの形成を促す場としても十分期待できるものであろう。

3-3 地域の現状と課題を共有するプログラム

(1) プログラムの背景

プログラム名：お話を超えて

実施日：2018年5月20日 11:00-12:45

このプログラムは、美術館 Musei Civici の教育担当チームによって企画・運営された物語創作の活動である。6歳から11歳までの小学生約20名とその家族が参加し、隣接する博物館 Palazzo dei Musei の多目的室で行われた（図7）。地域の課題と現状を共有するための哲学的テーマが「語りのアプローチ」として組み込まれていた。

(2) 活動の実際

導入時、スタッフは「壁には様々な壁がある。どんな壁があるのだろう。あちらとこちらを隔てる壁、自分たちを守るための壁もある。でも、今日の私たちが出会うのは物語を伝える壁。それは、異なる言葉や考えを織り交ぜながら、私たちの地平を広げてくれる壁となります」と語りかけ、参加者を物語創作の活動へと誘った。

次に、壁が描かれた絵（図8）をスクリーン画面に映し出し、壁の内側の世界で住む物語の主人公をイメージさせた。子どもたちは、「12歳の男の子、名前はフランチェスコ」「メガネをかけている」「黄色い靴下に、青いズボン、セーターは赤」と、互いのアイデアを重ねなが

ら、物語の主人公フランチェスコを誕生させた。スタッフは、さらに1体の人形を見せながら「壁の向こう側も人がある。その人は、どんな景色を見て、誰とどんくらしをしているのだろうか。壁の向こうの物語を絵本にしよう」と投げかけ、子どもたちを隣の作業室へ移らせた。

作業場に移った子どもたちは、まず、アイデンティティシートを活用しながら物語の主人公を考えた。8歳ぐらいの女の子は、「名前はエリーザ、年齢28歳、職業歌手、夢は空を飛ぶこと、特徴は体に傷があること（ドラゴンと戦ったから）」と記していた。次は壁が描かれた表紙・白紙・黒紙・アルミシート・透明シートといった絵本頁となる数種類の支持体を選び、複数の描画材や素材を用いて、壁の向こう側の主人公が登場するストーリーを考えた。透明シートに描いた絵の重なり具合を操作させながらお話の展開を考えている子ども（図9）や毛糸がもつ線の動きや質感を活かして場面の様子を表そうとしている子どもの姿などが見られた。30分ぐらいすると、ほとんどの子どもたちが物語のストーリーを3～5枚の絵に表現していた。絵本づくりも終盤となった頃、2人のスタッフが数枚の絵を掲げながら、「別の回に参加した子ども達の絵がここにあります。交換をしたい人は自分の絵と取り替えることができます」と問いかけた。すると、半数以上の子どもが絵の交換を希望し（図10）、物語の1頁となるように各自の絵本に差し込み、持ち帰ることができるように整えた。

スタッフは、再び子どもたちを最初の部屋に誘導し、まとめの活動へとつなげた。壁の内側の主人公フランチェスコが壁を超えていく様子をイメージさせながら、

子どもたちに「タッタ、タッタ、タッタ……」と太ももを叩かせ、馬に乗って駆け抜ける様子を音で奏でさせた。その音に合わせて、「フランス人と出会ったらボンジュール」とスタッフが大きな声で挨拶をすると、子どもたちも「ボンジュール」と続いた。同じ調子で、「タッタ、タッタ、タッタ……」、「スペイン人と出会ったら、オラ」「オラ」と別の言語で挨拶をした。このような調子で、20カ国ほどの言語で挨拶を交わしたあと、スタッフは次のようなセリフで幕を閉じた。「フランチェスコ、フランチェスコ、壁を越えるために国境に壁をつくった。壁に扉を付け、それを開けて新しい物語を開いた」保護者や子どもたちから、割れんばかりの拍手が起きていた。

(3) 考察

「物語を伝え合う壁」といった哲学テーマが設定されたにもかかわらず、思い思いの方法で子どもたちが物語創作に取り組む事ができたのは、色や形、素材といった造形の言葉を活用してストーリーを展開させることのできる場が設定されていたからではないか。透明シートや毛糸の中に潜在するユニークな造形の言葉は、小学生の子どもにとっても、自らの思考やアイデアを組み立てるための重要なツールとなっていたと考えられる。

「物語を伝え合う壁」といった課題を共有していたのだが、創った物語を伝え合ったり紹介し合ったりする活動の場はなかった。絵本創作の終盤時に、物語の一部となる絵の交換を促したことに着目すると、創作した物語を伝え合う活動は最初から想定していなかったであろう。むしろ、「物語を伝える壁」というテーマを丸ごと家庭に持ち帰り、他者のアイデア頁を加えた新たな文脈へと物語を再創造させながら、家庭の中で「物語を伝え合う壁」を実現させることを期待していたのではないか。

レッジョ・エミリア市の移民の割合（16.4%）は、イタリア全体の割合（8.5%）の約2倍であり、移民は広範囲の国から訪れている。この「物語を伝える壁」というテーマの設定も、地域の移民問題を共有するためのものであろう。20カ国以上の言葉で語られた「こんにちは」は、街のいたるところで聞こえてくる挨拶の言葉とも言えよう。「物語を伝える壁」というテーマを設定した「語りのアプローチ」は、子どもも、地域の現状や課題を共有し、良いより解決策を考える力を持っている市民として尊重されているからこそ成り立つものである。

4 まとめ

以上の論考から、市民表現教育プロジェクトとしての reggionarra の質的な成長を促す背景と実際については、



図7：博物館の会場
（導入とまとめの活動場所）

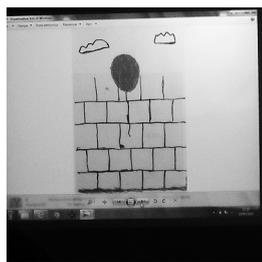


図8：導入時に映し出された
壁の絵

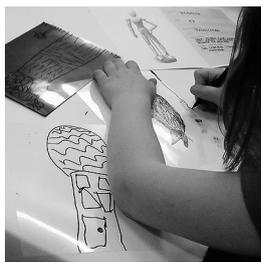


図9：透明シートの絵から
展開を考える子ども



図10：絵の交換を希望する
子どもたち

次のようにまとめることができる。

- ① 保護者たちの reggionarra への「参加」は、乳幼児学校の子どものための「美しい語りの言葉を手に入れるようとする学び手」から、「自らの言葉と解釈を与えて地域で語ろうとする表現者」としての参加へと変容している。
- ② 市の教育サービスの拡大によって、各機関や各プロジェクトチームの教育財産（人材・場所・教材・言葉）を活かし合う協働体制が整ってきている。
- ③ 「語りのアプローチ」は、レッジョ・アプローチの教育哲学が根底にあり、互いのイメージや思考を共感的に理解し、解釈やアイデアを重ねるプロセスをつくり出すために、造形の言葉などの多様な言葉を用いている。
- ④ 2018年 reggionarra では、市民表現教育プロジェクトとしての質的な成長を促すために、次のような「語りのアプローチ」が用いられていることを検証した。
 - ・自らの手と素材によって得られる言葉とイメージで、物語を紡ぎ出す「語りのアプローチ」
 - ・移民の高校生の母国語なども活用し、アイデンティティや居場所をつくり出そうとする「語りのアプローチ」
 - ・地域の現状と課題を共有するためのテーマが設定された「語りのアプローチ」

また、これらの背景や実際を俯瞰すると、保護者の「参加」意識や市の教育サービスの対象が、乳幼児教育から生涯教育の場へと拡張していることが認められる。2018年 reggionarra では、手で触る言葉や母国語などの新しい言語を活用した「語りのアプローチ」が認められたが、それでも「造形の言葉」は、物語を聞き合う人たちの解釈や思考を助ける言葉としての役割を果たしていたと言えよう。

【謝辞】

Paola Ferretti 氏とのインタビューの設定については、石井希代子氏にご協力をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

【付記】

Paola Ferretti 氏へのインタビュー記録を本研究の資料として扱うことについては、Paola Ferretti 氏と氏の所属先責任者の承諾許可を得ています。乳幼児教育現場と異なり、地域に開かれた場所での reggionarra の活動については、現在のところ取材撮影等の制限はありません。筆者らによる2016年 reggionarra の報告書（2017年）については、ローリス・マラグッツィ国際センター内のドキュメンテーションセンターに提出済みです。本研究はJSPS 科研費 JP15K01525 の助成を受けたものです。

【註】

- 1 ジャンニ・ロダリー・ワークショップ, 2011, 「レッジョ語り」, 佐藤学 (監) 『驚くべき学びの世界—レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』, 東京カレンダー株式会社, p. 255
- 2 濱口由美, 高野牧子, 2018, 「市民参画型パフォーマンス評価への提

- 案—レッジョ・エミリア市の文化プロジェクト「レッジョ・ナラ」の検討を通して」, 『福井大学大学院 教師教育研究』, 11, pp. 19-28
- 3 ローリス・マラグッツィ (1920-1994) は、レッジョ・エミリアの幼児教育を世界最高水準に導いた教育実践家である。
- 4 L・マラグッツィ, 2012, 「権利の憲章」, レッジョ・チルドレン (著), ワタリウム美術館 (編), 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』, 日東書院本社, pp. 343-344
- 5 連帯と協力の市民同盟の伝統については次の文献等を参照, C・エドワード, L. ガンディーニ, G. フォマン, 2001, 「はじめに=背景と出発点」, C・エドワード, L. ガンディーニ, G. フォマン (編), 佐藤学・森真理・塚田美紀訳, 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世織書房, pp. 10-13
- 6 佐藤学, 2012, 「子どもに学ぶ創造性の教育」, レッジョ・チルドレン (著), ワタリウム美術館 (編), 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』, 日東書院本社, p. 16
- 7 保護者へのインタビュー記録は、次の著書に記されている。C・フィンタネツ, M. ジャンルディーニ, M. ソンチーニ, 2001, 「親たちの声」, C・エドワード, L. ガンディーニ, G. フォマン (編), 佐藤学・森真理・塚田美紀訳, 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世織書房, pp. 223-237
- 8 マラモッティエー幼児学校 (Scuola dell'infanzia Giulla Maramotti) 2008年にレッジョ・エミリア市の洋服メーカー MaxMara 社を運営するマラモッティ財団が設立した半官半民の運営施設。参加のエピソードについては、2016年5月14日に訪問した際のフィールドノートからの抜粋である。
- 9 2016 reggionarra の実際については、次の報告書に詳細にまとめている。濱口由美, 高野牧子, 猶原和子, 2017, 『レッジョ・ナラのキセキ』, レッジョ・ナラ研究会, 全55頁
- 10 通訳は石川敏子氏に依頼
- 11 『re child-REGGIO CHILDREN NEWSLETTER』は、乳幼児教育の中心機関である REGGIO CHILDREN から発行されているニュースレターである。
- 12 翻訳協力者2名については次のとおりである。Ivan Lombardi 氏 (福井大学国際地域学部助教), Nakada Akiko 氏
- 13 ジャンニ・ロダリー・ワークショップ, 2011, 「レッジョ語り」, 佐藤学 (監) 『驚くべき学びの世界—レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』, 東京カレンダー株式会社, p. 256
- 14 濱口由美・高野牧子, 2018, 「市民参画型パフォーマンス評価への提案—レッジョ・エミリア市の文化プロジェクト「レッジョ・ナラ」の検討を通して」, 『福井大学大学院 教師教育研究』, 11, pp. 25-26
- 15 1970年代以降の教育行政については次の文献等を参照した。S. スパッチャーリ, 2001, 「学校経営における地域と教師の連携」, C・エドワード, L. ガンディーニ, G. フォマン (編) 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世織書房, pp. 10-13
- 16 レッジョ・チルドレン, 2012, 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録』, 日東書院本社
- 17 『re child-REGGIO CHILDREN NEWSLETTER』 2/2017 発行, 本号にはレッジョ・エミリア市長 luca Vecchi の「参加と市民権」「議会選挙と民主主義」, マラグッツィの「参加と民主主義の学校」が掲載されている。
- 18 <https://www.tuttitalia.it/emilia-romagna/12-reggio-emilia/statistiche/cittadini-stranieri-2018/> (2018年9月10日アクセス) 移民の割合については、人口統計外国人市民レッジョ・エミリア 2018年調査による。イタリア全体 (8.5%) と比較すると、レッジョ・エミリア市は約2倍 (16.4%) である。
- 19 L・マラグッツィ, 2001, 「歴史と思想と基本哲学」, C・エドワード, L. ガンディーニ, G. フォマン (編), 佐藤学・森真理・塚田美紀訳, 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世織書房, pp. 140-141, 本著書においては、色・形・光等の表現 (言葉) が、「造形の言葉」ではなく、「図像の表現」と訳されているが、同様の意味であると判断し、本稿では「造形の言葉」と置き換えた。
- 20 Y. ヴェッキ, 2001, アトリエスタの役割, C・エドワード, L. ガンディーニ, G. フォマン (編) 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』, 世織書房, pp. 209-221, 前註と同様, ここでは色・形・光等を用いた表現 (言葉) が「造形の言葉」ではなく、「視覚的な言葉」と訳されているが, こちらも同様の意味であると判断し, 本稿では「造形の言葉」と置き換えた。